

「書物と装飾 (2)」

研究年度・期間：平成 23 年度

研究ディレクター：長谷川郁夫
(文芸学科 教授)

共同研究者：山縣 熙
(文芸学科 教授)

藪 亨
(教養課程 教授)

田中 敏雄
(教養課程 教授)

豊原 正智
(芸術計画学科 教授)

出口 逸平
(文芸学科 教授)

学外共同研究者：高麗 隆彦
(東京造形大学 教授)

瀧本 雅志
(岡山県立大学デザイン
学科 准教授)

福江 泰太
(文芸学科 非常勤講師)

書物と装飾芸術の関係については、これまで東西の哲学者や文学者や装幀家などによって、書物のすぐれた精神性に対峙する美しい物質性の視座からさまざまに論じられている。19世紀末に量産による粗悪な書物の氾濫を憂慮したウィリアム・モリスは、「美しい書物」の復興を決意し、「中世の彩飾写本」や「初期印刷本」を範として、「装飾への愛着」や「美しいものによって美と適切さを表現する感覚作用」の重要性を説いている。また、20世紀当初のパウハウスにおいては、反装飾芸術の見地から機械時代の「新しい書物芸術」の出現が要請され、タイポグラフィーが機能的に把握されて、明確さと読み易さを最優先させながら、写真が進んで取り込まれて新しいタイポグラフィー言語の創出が企てられている。そして今日では、急激な技術革新による電子化は、書物と装飾の在り様を根本から大きく揺さぶっている。そこで本共同研究は、こうした書物と装飾芸術の関係について、本学図書館所蔵の「西欧中世写本ファクシミリ」、「ケルムスコット・プレス刊本コレクション」、「日本近世の絵手本」などの関連資料を中心にして、文芸、美術、デザイン、工芸、建築、映像などの多角的な視座から個別的に、また社会文化史的に調査研究するとともに、その芸術文化史的な意味を理論と制作の双方から総合的に考察し、その成果を現代そして未来の書物創造のエネルギー源として組み込み、書物と装飾の関係の可能性を探ることを目的とする。

そのため、本共同研究は3年計画とし、2年度にあたる平成23年度は、学内外の共同研究者からなる研究会を組織し、次のような見地から研究をさらにより一層推進した。

【A】本文（テキスト）について……書物のすぐれた精神性

【B】本文の装飾や器としての書物について……書物の美しい物質性

それぞれに対しての1) 歴史的なアプローチ、2) 文化面からのアプローチ、3) 創造性の観点によるアプローチ、を複合的に試みた。

1) については、中世の写本や日本近世の絵手本を取り上げ「テキストと装飾」はどのように関連付けられデザインされたかを問うとともに、初期印刷本を取り上げ、木版装飾の役割から【A】信頼すべきテキストの成立を目指すための校正、校閲、索引の役割までなどを問うた。

2) については、ゲーテンベルク以降、複製技術による書物がどのように文化を先導したか、大量消費、マス・メディアの時代において本の装飾とは何か、を問うた。

また、【B】の観点からは「高貴な意図」としてデザイン・装本の問題が浮かんでくる。ウィリアム・モリスのケルムスコット・プレス刊本を新たな視座から問うことを推進した。

3) については、美しい書物の成立に関わる根本問題の今日的な視座からの考察を推進した。

テーマは多岐に亘り、とりあえずは試み、問題提起のための研究ではあるが、文芸学科のみならず、他学科の関連講座担当者との連携、また学外研究員の協力を得て研究会やシンポジウムを開催し、各自のテーマについて報告し論議をさらに拡げ深めた。また、小型の活版印刷機（蝶番式プラテン小型活版印刷機「Adana-21J」）を購入して、揺籃期本時代の活字活版印刷に立ち返って、活字を手で組んでいくというプロセスを検証し、文字と組版という美しい書物の成立に関わる根本問題を今日的な視座から掘り起こすことに着手した。

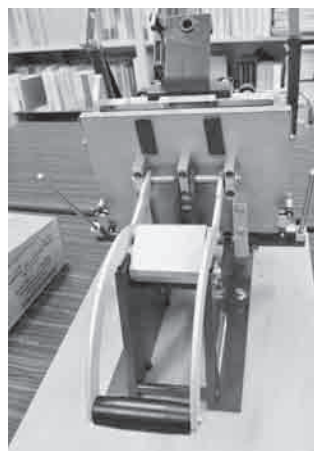
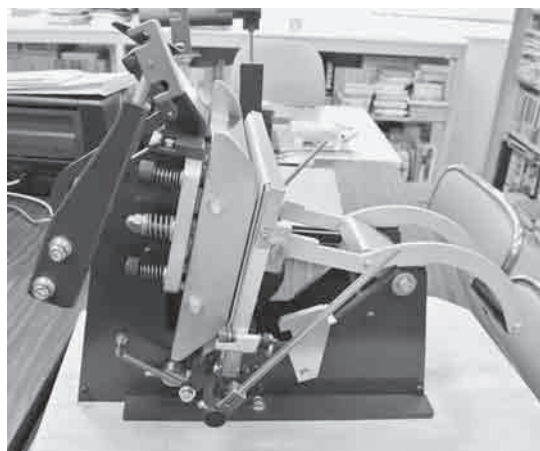
その間を活用して本研究成果の一端を、シンポジウム「ブックデザインの現在」（大阪芸術大学大学院 32 号館視聴覚教室 1、平成 23 年 11 月 11 日）とシンポジウム「書物の美」（大阪芸術大学はたるまちキャンパス、平成 24 年 2 月 18 日）において、さらには大阪芸術大学図書館所蔵品展〈タイポグラフィカ〉（芸術情報センター 4 階展示コーナー、平成 23 年 7 月 13～28 日）、大阪芸術大学所蔵品展〈ヴィクトリア朝の書物と装飾―挿絵画家としてのウォルター・クレイン〉（大阪芸術大学博物館地下展示場、2011 年 12 月 2 日～21 日）において、報告した。

そして本年度の研究成果に関して、以下の個別研究テーマに基づいて、研究報告書を作成した。

- 1、長谷川郁夫 ・昭和初期の装本感覚
- 2、山縣 熙 ・書物にとって装飾とは何か
- 3、藪 亨 ・モダン・デザインと書物造形
- 4、田中 敏雄 ・料紙と美
- 5、豊原 正智 ・カバーと本体との関係
- 6、出口 逸平 ・三遊亭円朝『真景累ヶ丘』の速記と挿絵
- 7、高麗 隆彦 ・装丁の現在
- 8、瀧本 雅志 ・これからの書物×美×美学
- 9、福江 泰太 ・明治初期の銅版本

蝶番式プラテン小型活版印刷機「Adana-21J」

本印刷機は、Clamshell type（二枚貝の貝殻を意味する）に分類される、手動式の卓上活版印刷機であり、名刺、カード、はがきなど、小型の端物印刷物に適している。金属活字や木活字のみならず、亜鉛や銅やの樹脂などの凸版など、さまざまな凸状印刷版を用いて印刷が可能である。



シンポジウム「ブックデザインの現在」

日時 11月11日(金曜日)午後4時30分～6時30分

会場 大阪芸術大学大学院・31号館1階・視聴覚教室I

ブックデザインの現在について、文芸、グラフィック・デザイン、美術、工芸、建築、映像などの多角的な視座から個別的に、また社会文化史的に見渡し、その芸術文化史的な意味を制作と理論の双方から総合的に考察し、ブックデザインの未来を探った。

平成23年度大阪芸術大学藝術研究所研究調査補助費「書物と装飾(2)」 研究会代表:長谷川郁夫

シンポジウム 「ブックデザインの現在」のお知らせ

ブックデザインの現在について、文芸、グラフィック・デザイン、美術、工芸、建築、映像などの多角的な視座から個別的に、また社会文化史的に見渡し、その芸術文化史的な意味を制作と理論の双方から総合的に考察し、ブックデザインの未来を探りたい。

テーマ:「ブックデザインの現在」

総合司会	長谷川郁夫 大阪芸術大学文芸学科教授	パネラー	山縣真 大阪芸術大学文芸学科教授
		新学 大阪芸術大学教養課程教授	田中敏雄 大阪芸術大学教養課程教授
		豊田正雄 大阪芸術大学芸術計画学科教授	出口逸平 大阪芸術大学文芸学科教授
ゲスト・パネラー	田村成彦 大阪芸術大学デザイン学科教授	基本健三 岡山県立大学デザイン学科准教授	藤江泰夫 大阪芸術大学文芸学科非常勤講師
	高橋善丸 大阪芸術大学デザイン学科客員教授		

田村成彦 (2005 Design)

高橋善丸 (2011 Design)

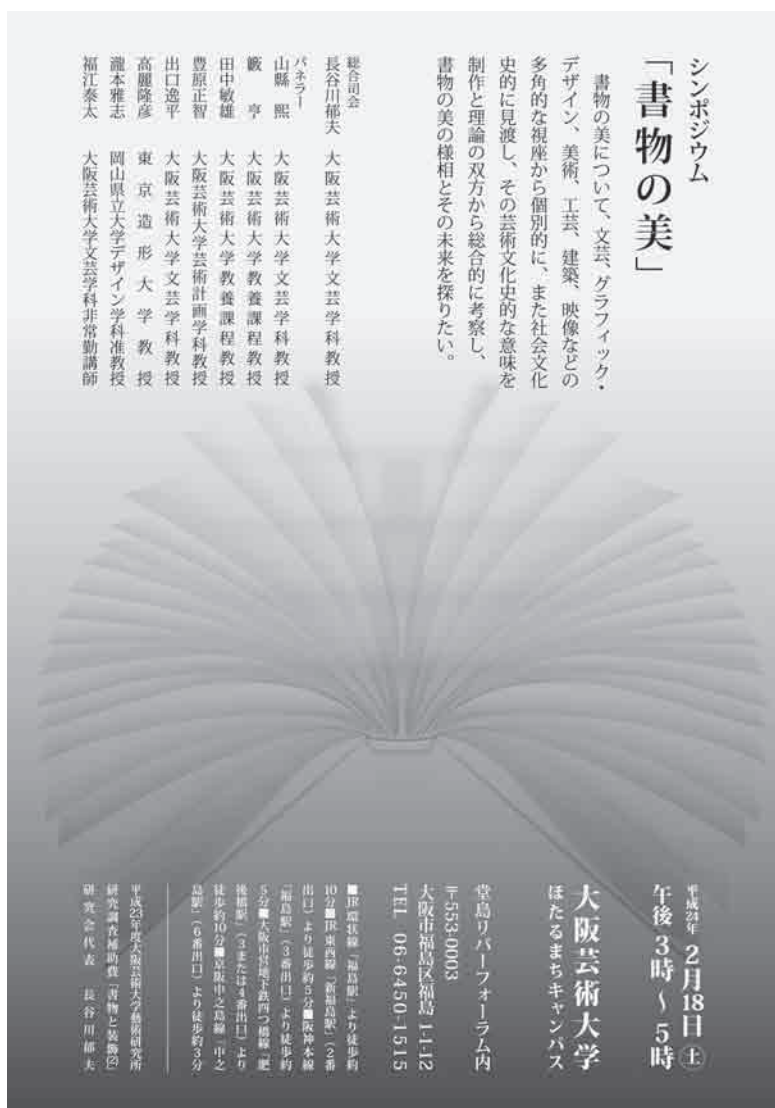
11月11日(金) 16:30～18:30
大阪芸術大学大学院 31号館1階 視聴覚教室I

シンポジウム「書物の美」

日時 平成24年2月18日(土曜日)午後3時～5時

会場 大阪芸術大学 ほたるまちキャンパス【堂島リバーフォーラム】

書物の美について、文芸、グラフィック・デザイン、美術、工芸、建築、映像などの多角的な視座から個別的に、また社会文化史的に見渡し、その芸術文化史的な意味を制作と理論の双方から総合的に考察し、書物の美の様相とその未来を探った。



シンポジウム
「書物の美」

書物の美について、文芸、グラフィック・デザイン、美術、工芸、建築、映像などの多角的な視座から個別的に、また社会文化史的に見渡し、その芸術文化史的な意味を制作と理論の双方から総合的に考察し、書物の美の様相とその未来を探りたい。

聯合司会
長谷川郁夫 大阪芸術大学文芸学科教授
山縣 照 大阪芸術大学文芸学科教授
飯 亨 大阪芸術大学教養課程教授
田中敏雄 大阪芸術大学教養課程教授
豊原正智 大阪芸術大学芸術計画学科教授
出口逸平 大阪芸術大学文芸学科教授
高麗隆彦 東京造形大学教授
瀧本雅志 岡山県立大学デザイン学科准教授
福江泰太 大阪芸術大学文芸学科非常勤講師

堂島リバーフォーラム内
〒534-0003
大阪市福島区福島1-1-13
TEL 06-6450-1515

平成24年 2月18日(土)
午後3時～5時

大阪芸術大学
ほたるまちキャンパス

■車庫直線「福島駅」より徒歩約10分■JR東西線「新福島駅」(2番出口)より徒歩約5分■阪神本線「福島駅」(3番出口)より徒歩約5分■大阪市営地下鉄四つ橋線「肥後橋駅」(3または4番出口)より徒歩約10分■JR阪中之島線「中之島駅」(6番出口)より徒歩約3分

平成23年度大阪芸術大学総合研究所
研究調査補助費「書物と装飾」
研究会代表 長谷川郁夫

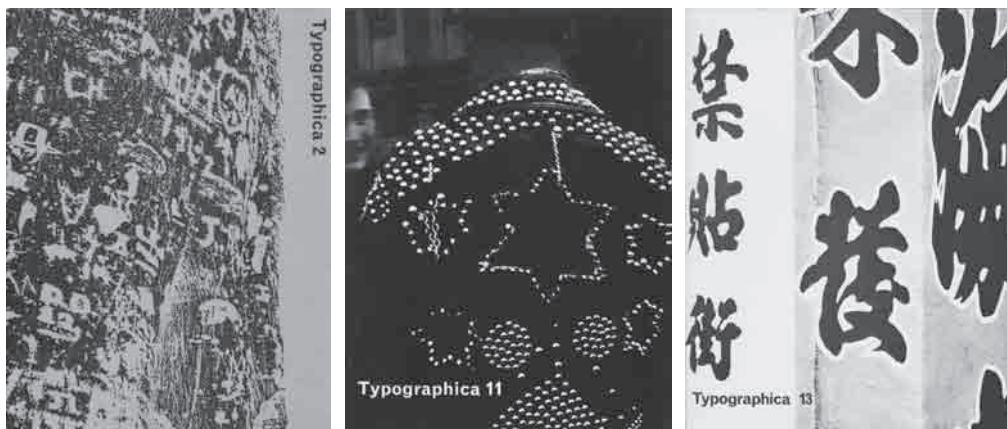
大阪芸術大学図書館所蔵品展
『タイポグラフィカ』(ニュー・シリーズ 第1号～第16号)

期間 平成23年7月13日～28日

会場 芸術情報センター4階展示コーナー

『タイポグラフィカ』誌は、第2次世界大戦後のロンドンでランド・ハンフリーズ社によって印刷・発行され、大いに注目を集めたイギリスの美術とデザインの雑誌である。本誌の創始者ハーバート・スペンサー(1924-2002)は、25才の若さで当誌の編集を始めており、当誌において彼は編集者、デザイナーで、しばしば記者でもあり、通常は別々であるこれらの仕事を統合しながら、18年間の長きにわたってこの雑誌を世に出している。本誌では、戦前にバウハウスなどで取り組まれていた構成的で機能的なニュー・タイポグラフィーの理念が汲み上げられており、タイポグラフィーの新たな実験とその実用化が鼓吹されている。

『タイポグラフィカ』誌は旧と新の2シリーズで、それぞれ16冊ずつ総計32冊が1949年から1967年まで刊行されている。今回の展示は、旧シリーズ(1949-59年、第1号～第16号)に続く新シリーズの表紙デザインである。新シリーズの『タイポグラフィカ』誌では内容的に変化が生じており、写真にその重点が移行していく。1960年代の『タイポグラフィカ』誌は、コミュニケーションの媒体物としての文字の形象を追求し続けるとともに、その一方では「ペンとしてのカメラ」を駆使して、街頭でのサインや文字、商業印刷物の機能とデザイン、写真と文字との統合など、視覚伝達デザインの諸問題に照明が当てられている。



雑誌名：Typographica (New series nos.1-16)

編集：Herbert Spencer 発行・印刷：Lund Humphries

発行地：London 発行期間：1960-1967

大阪芸術大学所蔵品展

「ヴィクトリア朝の書物と装飾 —挿絵画家としてのウォルター・クレイン—

期間 2011年12月2日～21日

会場 大阪芸術大学博物館 地下展示場

ウォルター・クレイン (Walter Crane, 1845-1915) は、ヴィクトリア朝のデザイナー、挿絵画家、油彩画家であり、若い頃に彫版技術の修業を積んでおり、60年代初めに挿絵画家の道を歩み出している。その際に大きな影響を彼に与えたのがラファエル前派の画家たちの挿絵である。またこの頃19世紀中葉には、ヴィクトリア朝の人びとが幼児を優しく扱い慈しむという風潮に乗じるかのように、幼児向けの六ペンス彩色絵本「トイ・ブック (Toy Book)」が現われている。クレインはこのトイ・ブックの紙面デザインの先駆者であり、70年代中頃までこの分野で大いに活躍している。そして80年代後半になると、クレインの挿絵デザインの作風が変化しており、そのしなやかな曲線と豊かな色彩からなる装飾デザインの斬新さが注目され、アール・ヌーヴォーの先駆者のひとりとして目されるようになる。



